科目区分：教職科目Ａ，授業科目：初等音楽科教育法

初等音楽科教育法

音楽教育専修・田邉　隆

１．授業の概要

この科目は「指導法に関する科目」区分にあたるが、受講学生を３区分（Ａ＝２クラス、Ｂ＝１クラス）し、2 名の教員で担当している。以下の報告は、Ａ 2（音楽・保体・英語・聴言・発達）クラスについてである。

この授業は「音と音楽表現の違いを認知」「音楽授業に対して改善点を指摘」「音楽授業の構想と教材作成」をかかげ、実践的な模擬授業を中心に実施した。「音と音楽表現の違いを認知」「音楽授業の構想と教材作成」については、教員の講義内容で概略を示し、模擬授業後のコメントで補足する形をとった。また各授業後に行う学生の意見交換は活発に行われ、討議時間が不足することがしばしばであった。今後行われるであろう教育実習・教員採用試験や授業研修会などの事前体験としても授業後の質疑応答・討論は有効な時間であると考える。

模擬授業で取り扱った内容・領域は、「身体表現を伴った歌唱(合唱)」「ミュージカル創作」「学校行事を想定したリズム指導」「ボディーパーカッション」「イメージと根拠を意識した鑑賞」「パートナーソング」「音・音楽づくり」「トーンチャイムアンサンブル」「郷土の音楽」「リズム指導の工夫」を行った。これらの授業を通して、コード(和音)認知のための独自の「コード尺」など教材教具の開発がなされた点は収穫であった。また全ての授業を撮影し、DVD で学生へフィードバックした。指導案は事前に概略を、事後に完成版の提出を求めた。

履修登録数 50 名であるが、収容数 45 名の小演奏室で行ったため、特に身体表現を伴う活動で支障が出た。講義室減少傾向の中、適切な講義室確保は今後の課題の一つである。また全体の出席率は 94 ％であるが、聴言と発達専修はともに 98 ％の高率であった。

２．アンケート結果(回答数 44)

7 項目(以下 a ～ g)の 5 段階評価と自由記(h)の併用で無記名アンケートを実施した。

a)教職に就く意志(⑤=強い希望～①=希望しない)
⑤(45%)／④(30%)／③(9%)／②(9%)／①(7%)

b)現場の音楽授業(⑤=強い関心～①=関心無し)
⑤(34%)／④(41%)／③(18%)／②(7%)／①(0%)

c)講義の難易度(⑤=極めて難解～①=極めて平易)
⑤(0%)／④(7%)／③(91%)／②(2%)／①(0%)

d)教員の講義時間(⑤=多く希望～①=少なく希望)
⑤(0%)／④(27%)／③(73%)／②(0%)／①(0%)

e)模擬授業の回数(⑤=多く希望～①=少なく希望)
⑤(0%)／④(2%)／③(86%)／②(10%)／①(2%)

f)授業後の意見交換時間(⑤=多く希望～①=少なく)
⑤(5%)／④(11%)／③(82%)／②(2%)／①(0%)

g)模擬授業の持ち時間(⑤=多く希望～①=少なく)
⑤(0%)／④(2%)／③(98%)／②(0%)／①(0%)

h)自由記述

実技面については、合奏(ピアノ・リコーダー・トーンチャイム)体験を希望する、アカペラ合唱・発声・指揮法に関する体験を希望する、創作領域の具体的な指導方法を考察したい、などの意見が出された。

運営面では、模擬授業後の省察を討論に限らずレポートなどを併用して欲しい、模擬授業の領域を偏りの無いように希望、現場で実際に授業を体験したい、もっと広い講義室で実施して欲しい、などが出された。

３．今後の課題

様々な音楽学習活動を可能にする広い空間を確保することは、授業方法の固定概念を払拭する意味でも必要である。また模擬授業で多くの時間を費やしている現況にあって、教員からの情報提供の内容と適時性について、講義の内容と模擬授業の内容の役割・分野の分担について､いっそうの検討が必要である。

さらに「初等音楽」未履修学生への理論・実技面のサポートを教育法で如何に行うかについても今後の課題である。

科目区分：教職科目Ｂ，授業科目：音楽科教育法Ｉ

音楽科教育法Ｉ

音楽教育専修・田邉　隆

１．授業の概要

音楽科教育法は、Ｉ＝Ａ教員、Ⅱ＝B 教員、Ⅲ＝C 教員、Ⅳ＝A 教員の 3 名で分担している。この科目は教育法の導入でもあり、中等教育における音楽科教育の実態と理念を概観し、模擬授業の体験を通して、実際の授業づくりで求められる内容の確認を行うことをねらいとしている。特に計画案の作成や効果的な教材の作成を行う中で、教科専門の力がどの様に必要であるかを認識させる意味は大きいと考える。すなわち、教育法と教科専門との関連を常に意識した授業運営が必要であると考える。そのことが、授業の実践力を高める上で、重要な視座である。

受講数は、15 名（音楽外専修３名を含む）であり、内訳は音楽専修：音楽外専修＝ 12 名：3 名、学校教員養成：音楽文化コース＝ 6 名：9 名である。

全体の出席率は 97 ％である。しかし介護実習による欠席も含めると、92 ％の出席率となる。今学期は、介護実習が特定の日に集中し、1/3 が欠席する日があったため、その日の授業は内容を変更し、実技（アンサンブル）体験の枠として実施した。

一方、模擬授業は数名のグループ編成で行ったが、実際には 1 人 1 回ずつ模擬授業（30 分授業）が実施出来るよう回数確保を配慮した。授業で取り扱った内容・領域は、「指導案」「学習指導要領」「ラップ」「オペラとミュージカル」「合唱」「楽曲の背景」「楽曲のルーツ」「伝統音楽」「トーンチャイム」「ミュージカルと合唱」「民族音楽」「作者の意図」「演奏・演奏者を通して感じるもの」「ボディーパーカッション」「リコーダー」「音楽と情報処理（教材作成におけるメディア活用）」などである。

２．アンケート結果（回答数 15）

7 項目（以下 a 〜 g）の 5 段階評価と自由記（h）の併用で無記名アンケートを実施した。

a）教職に就く意志（⑤＝強い希望〜①＝希望しない）
⑤（20%）／④（20%）／③（40%）／②（13%）／①（7%）
将来の希望校種（この項のみ回答11名で、複数回答）
幼（9%）／小（45%）／中（27%）／高（64%）／他（0%）

b）現場の音楽授業（⑤＝強い関心〜①＝関心無し）
⑤（53%）／④（33%）／③（13%）／②（0%）／①（0%）

c）講義の難易度（⑤＝極めて難解〜①＝極めて平易）
⑤（0%）／④（7%）／③（93%）／②（0%）／①（0%）

d）教員の講義時間（⑤＝多く希望〜①＝少なく希望）
⑤（0%）／④（20%）／③（80%）／②（0%）／①（0%）

e）模擬授業の回数（⑤＝多く希望〜①＝少なく希望）
⑤（0%）／④（0%）／③（100%）／②（0%）／①（0%）

f）授業後の意見交換時間（⑤＝多く希望〜①＝少なく）
⑤（7%）／④（7%）／③（86%）／②（0%）／①（0%）

g）模擬授業の持ち時間（⑤＝多く希望〜①＝少なく）
⑤（0%）／④（40%）／③（60%）／②（0%）／①（0%）

h）自由記述

メディア活用の情報についてほとんど知らないので、もっと活用方法の演習を含めて情報が欲しい、附属等で実際の現場で授業体験や音楽活動を希望する、など限定した希望が出された。

３．今後の課題

この授業科目が、教育法の導入段階であるため、アンケートに見られるように、なかなか授業形態や授業内容について、批判的に捉えることが難しい。肯定的な見方とともに批判的な見方のバランスが取れるように、教員側から意図的に授業展開と内容批判について、様々な観点を具体的に提示し、評価規準と評価基準を記入する評価票の提示が必要と考える。

また音楽教材作成におけるメディア活用の情報提供や演習内容を、教科専門科目である「音楽教育学演習」の中でどう取り入れるかの検討も必要であると考える。